毎月1回20日発行　　（昭和31年3月28日第三種郵便物認可）

山と博物館

編集責任者　大町山岳博物館

爺ガ岳の種まき爺さん

爺ガ岳の種まき爺さんは今年も再び同じ場所に現れた。そして、山麓に住む人々の生活を静かに見おろしている。爺さんが現れ始めると山麓の農民は苗代の種まきを始める。「今年も苗のおきがいいように」と爺さんに向って唱えながら……

NO. 17　1957年5月20日　大町山岳博物館後援会 発行

北ア山麓の稲作

山に結ばれる農業

北アの雪融けが進むにつれて、爺が岳の種まき爺さんと、白馬岳の代馬（しろうま）の姿が再び現れはじめる。いずれも雪の消えが早い場所の岩肌が種まき爺さんの形に、あるいは代馬の形になって山麓から望まれるのである。

爺が岳、白馬岳などの名称は、残雪に浮ぶこれらの形によってつけられ、山麓に生活する人々の農事に関する季節指標として古くから親しまれてきたものである。

殊に白馬岳は本来の代馬（しろうま）が後世になって誤称された白馬（しろうま）となり、更に今日では白馬（はくば）にまで転化されてきている。このために白馬岳には名前にも似つかわしくない黒い馬が現れるわけである。この頃になると北ア山麓の人々は、残雪豊かに輝やく白い峰々を映した水田で一せいに田植の準備にとりかかり、稲作という生産活動と結びついた田園の風物詩を展開する。

北ア山麓の大町地方といっても、木崎、中綱、青木湖を總称した仁科三湖の北部、四か庄盆地（白馬岳の山麓地方）と松本平（爺が岳の山麓地方）では田植風俗に大きな相異が見られる。それは地質や土壌の違い、あるいは気候条件など自然環境の制約によって生じた農業経営上の問題であろう。遠い祖先から引き継がれた田畑で、営々とした土を相手に生産活動を繰り返し、農具の改良、農地の改良など少しづつではあっても耕作方法に改良が加えられて、自然環境、人為環境への合理的な適応が試みられてきた。

江戸時代の作方日記から

江戸時代、元文年間（西歴1736年）の作方日記によって往年の田植え準備を眺めてみよう。

春分 二月中 （3月21日） 1、田へ馬屋こい出ス一反三十駄 1、田うち **清明** 三月節（4月5日）1、田打 1、すご池へ入土用より七日 池中二十日 一俵取弐斗積 1、田へ芝付る 多少地面ニ寄 1、刈敷ほネ拾い 1、苗代壱坪ニ付籾種七八合ツ入積りニ蒔へし **穀雨** 三月中 （4月20日） 1、土用明二三日前すぐ蒔 古人日三月苗代三日遅 四月苗代三日早云い恐霜 1、田あぜ切 田小切 刈敷骨拾 1、田芝ちらかす 1、田のあて芝切 **立夏** 四月節 （5月6日） 1、スジ蒔より十二日目半夏よりが五十日前 一俵三合 1、田のあぜぬる 1、田しろこする 1、田へ馬屋こい出ス 1、同ちらかす **小満** 四月中 （5月21日） 1、苅敷山の口明 夏至より廿五日前 一反三十駄 **芒種** 五月節 （6月6日） 1、古人日 夏至より七日前 田植一反早乙女 弐人積

（栗林文書 大町作方日記より）

5月の安曇野

田ぶち、あらおこし、田うちなどとも呼ばれ、田植の前最初に田を起すことである。沼田では写真のように膝までつかつて作業する。

苗代「苗半作」（なえはんさく）といつて、苗代田（なわしろだ）での育苗の状況によつて、その年の作がらが決められてしまうといわれ、農家では昔から非常に大切にしている。このため、その間における祈願、禁忌、呪法など幾多のローカル色豊かな慣習がある。

馬耕（ばこう）と代（しろ）田植前の作業で馬耕の後、水を張つて代車（しろぐるま）を馬や牛に引かせる。近年では動力を用いるようになつた。

箱おあしと板おあし、〝箱おあし〟で堆肥やかつちきを踏み込んだ後〝板おあし〟で〝更に小さなむらや足踏を直し最後の仕上げをする

←箱おあしを踏む農夫　沼田は深くつもるために馬を使う代ができない。このため〝田うち〟の後〝鍬じろ〟（鍬を細かく動かして土の塊を砕く）をして更に写真のように〝箱おあし〟をはいて踏み歩き、まき散らした堆肥やかつちき（青草をまき散らして肥料を使う）を踏み込み整地する。

地方色豊かな風俗や習慣

長い歴史に生きた農業は、多少の変化を見せながらもその風俗や習慣にはいにしえの面影を残している。それらは地方によって、更にその部落などによって異ったニュアンスとなって現代社会に生吹いている。

現在使われている農ら言葉の中にも、あら起し（春初めに田を起すこと）、こやしまき、たこぎり、かりしきかり、間ふみ（二度目の田をふむこと）、うえじろ（最後のしろ）、大あし、あぜぬり、こあし、かぶつおさえ、なえとり、水あて、田うない、あらくれ、なかふみ、いぶおり、かぶてるぬき、田かき、くろかき、など耕作の過程にでてくるそれぞれの作業に特有の名称がつけられて今日なお北ア山麓の人々の間に生きている。

そらぐち、階段耕作地帯に見られる風俗、写真（下）のような〝そらぐち〟と呼ばれる運搬用具で、堆肥や苗を運搬し、高所にある水田を管理する。

苗とりと苗運び、苗代田の苗は田植直前に苗とりが行われ、本田に運ばれる

いぶおり　〝えぶり〟〝よぼり〟などといわれ代の終つた後の仕上げである

田植　收穫への望みを託した農家の最大の行事。〝えいく〟と呼び隣近所お互に労働力の交換を行つて仕事を進める写真は7反歩の水田で21人の田植。

夏山シーズンを迎える

北アの受入体制

夏山のシーズンを前にして北アの地元関係者は受入れ準備を急いでいる。大町市では5月8日、松本市では 5月10日それぞれ夏山受入れ対策打合せ会を開き、山小屋、旅館等の宿泊料、登山コース、交通関係、遭難対策などを協議した。出席者は北アの山小屋、旅館、交通機関、案内人組合、山岳団体、官公庁等の関係者。

山小屋宿泊料は550円（大町市内） 大町市内の場合、旅館宿泊料金は普通旅館が 1泊400円～1,000円。木崎湖畔の部屋借りは個人 1人50円。葛温泉は二食付基本料金が460円～960円、自炊は室代と薪代を加え150円～200円。山小屋宿泊料金は米5合持参、弁当付で550円、但し三俣蓮華小屋は600円、大沢小屋は500円。（何れも団体の場合は別）

バンガローは昨年並（仁科三湖付近） 木崎湖畔のバンガローは4.5人用1泊400円、2人用250円。青木湖畔10人用550円、 2人用250円、25人用1,000円で昨年並。貸テントは木崎湖4.5人用250円、6.7人用300円、2.3人用200円。舟料金は青木湖ボートは 1時間50円、和船も同じく50円。木崎湖はボート60円、和船50円、 ヨット200円モーターボート500円、遊覧船は湖一周大型800円、小型500円。

木崎湖経由葛線運行 松本電鉄KKでは登山客の増加にそなえ7月上旬から関係路線を増発する。大町を起点とする葛線は大出まで1日4本、七倉まで3本、葛まで6本をたてる。鹿島線は大谷原まで3回、源汲まで 2回、大沢寺まで1回。今年は新しく大町、木崎、野口、葛温泉間往復の大町木崎湖経由葛線が日に 3回運行される。なお、四ツ谷、猿倉間の白馬線は7月1日から12往復となる。

五月の烏帽子小屋

（博物館だより） 4月17日信濃大町駅内陳列替、26日本年度第一回協議会、27日植樹、28日居谷里気象調査、29日北安神城方面野鳥観察及び植物採集、大町市主催観光桜まつり（5月5日まで）、30日居谷里動物調査、30日黒部上流自記雨量計設置打合せ会、7日カメラ技術講習会、 9日新館工事外打合せ会、10日雨量計設置打合せ会、11日大町山岳会員と博物館員会、16日居谷里野鳥生態写真撮影、17日山の自然科学教室開設打合せ会、雨量計設置打合せ会18日山の自然科学教室八方山下見登山

（今月の寄贈） シロマダラ1体大町市八日町山崎三郎、まいずる山岳会バッヂ1ケ同会折元秀穂　イシガメ2体大町市八日町青山茂男　ヤマネ2体北安白馬村神城堀ノ内吉沢沖　カワガラス3及び巣1ケ大町市俵町密沢虎男　ニツコウムササビ2体大町市平区木崎遠藤直澄

お願い　本紙の購読御希望の方は **1年分購読料170円（郵送料共）** を現金書留または郵便為替、郵便切手で御送り下さい。　大町山岳博物館後援会

臨時列車は例年通りか 今夏の入山者は北ア全体で昨年の二割増36万人と予定、国鉄では例年通り7月から新宿より2、大阪、名古屋より各 1の臨時列車を入れるものとみられる。大糸南線は八月頃全通の見通しであり、全通後は糸魚川方面から大町へ入る客も増えるであろう。　松本電鉄の大町、糸魚川急行バスは 2往復、頸城バスも同じ路線を 2往復する予定。

三俣への新コース開設 今年は従来の登山コースのほかに、白骨温泉――十石峠――乗鞍、湯俣温泉――三俣蓮華――雲ノ平（伊藤新道）の二つの新コースが開設された。新設された山小屋は黒部五郎小屋（伊藤正一）、大天井ヒュッテ（穂刈三寿雄）、蝶岳ヒュッテ（中村義親）の三つ。久しく閉鎖されていた高瀬入り濁小屋は休憩小屋として開設される。乗鞍バス道路問題はようやく具体化し本年度は県も本腰を入れており、開通調査が行なわれる見通し。

美ケ原に無線電話架設 電話は既設の白馬、乗鞍、燕、槍山頂のほかに美ケ原（山本小屋）にも新らしく架設される。診療所は既設の白馬、槍、徳沢、乗鞍、燕、上高地、涸沢の七ケ所のほかに西穂と鈴蘭小屋の二カ所に開設される予定。遭難対策としては登山訓

白馬乗鞍岳のガラ場を行く登山者

天気予報の掲示、登山者名簿の記入、案内標の整備登山計画書の提出、遭難防止協議会の結成等予防と早期救助につとめる。

山岳会

福岡山の会

＝福岡市荒戸町50＝

昭和5年11月、福岡山岳懇話会が設立され、その後〝山を語る会〟と改称、その会合の中から会設立の話が進められ、昭和7年8月現在の「福岡山の会」が誕生した。戦後一時会員は500名を数えることもあったが、現在はおちついた104名の会員でまとまっている会員の山行は毎月1回九州の山を目標とし、冬山は北アにいどんでいる。集会は例会、山の歌練習、研究会等を開き、技術の向上に努めている。バッヂは Fukuoka Yama no Kaiの頭文字をバックの山に配したもの。

編集後記 ▲「新緑の信州は実にすばらしい」と自然に親しむ若人が三々五々、北ア山麓、上高地、高瀬渓谷へと……▲ちょうどこの頃は農家にとって最も多忙の時節である。今年こそ豊作であってくれと願い、そして祖先から永く引き継がれる農事過程にそって毎年同じことを繰返しているのである。本号は北ア山麓の特色ある稲作を特集した。▲季節の変りは早いもの。地元は夏山受入体制の整備に大童、例年のことながら宣伝を大にして、実質が伴わないという非難のないように心掛けて貰いたい。登山者にも同様、山のエチケットはお互に守りたいものである。

山と博物館　No. 17　1957.5.20発行
編集発行人　大町山岳博物館
発行所　大町山岳博物館後援会
長野県大町市神栄町電話211番
印刷所　信州印刷株式会社